

枝吉神陽

えだよし しんよう

日本の未来を説くカリスマ学者。憂国の熱き俊英が仰いだ人生の師。



Edayoshi Shinyou

人物像

- 若者に夢を与えたカリスマ
- 学者であり思想家
- いったり、気遣いのできる細やかさ

義祭の志士に慕われた高潔な師

藩校・弘道館の教諭であった枝吉南濠の長男として佐賀城下鬼丸町に生まれる。実弟に後に明治政府で外務卿などを務めた副島種臣がいる。幼年期より神童と賞され、23歳の時には江戸幕府直轄の学問所「昌平黌」に学び、全国の俊英が集まる同舎の舎長を務める。帰郷した後は弘道館で教鞭を執る傍ら、父南濠の唱えた「日本一君論」を受け継ぎ勤王運動を行う。1850年、楠木正成を祀る「義祭同盟」を結成。尊王思想を説き、江藤や大隈、副島、島、大木らなど、後に明治政府の重鎮となる青年たちの眼を開かせた。幕末には各地に勤王組織が結成されるが、義祭同盟は藩の執政も参加したため、過激な行動には至らなかったが、志士魂を刺激し国家観を醸成する熱のこもった議論が繰り広げられた。1862年、コレラに感染した妻をいたわり看病するうちに自身も感染し、先立つ妻を追うように2日後、世を去った。彼の人格や思想は義祭の青年たちの心に宿り、明治の国作りの随所随所で影響を及ぼすこととなる。

【概略年表】

年	年齢	出来事
1822	文政5年 1	5月24日、佐賀藩士枝吉南濠の長男として生まれる
1844	弘化元年 23	江戸遊学を命じられ、昌平黌に学ぶ
1846	弘化3年 25	諸国遊行の旅に出、各地の文化に触れる 佐賀に戻り結婚 佐賀を訪ねてきた吉田松陰と会い、松陰は感銘を受ける
1847	弘化4年 26	江戸の昌平黌に復帰
1848	嘉永元年 27	昌平黌の舎長に任じられる
1849	嘉永2年 28	佐賀に戻り、弘道館で教鞭を執る
1850	嘉永3年 29	「義祭同盟」設立
1862	文久2年 41	コレラに感染した妻を看病し自らも感染、8月14日死去



▲龍造寺八幡神社に伝わる義祭同盟の連名帳(龍造寺八幡神社蔵)

あなたにとって枝吉神陽とは？

若き志士たちを導いた勤王の巨星

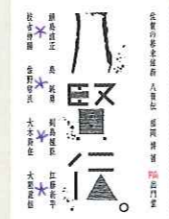
佐賀市文化財保護審議会委員
大園 隆二郎 さん



枝吉は幕末当時の若い志ある青年たちを魅き付ける魅力というか引力を持った人物でした。それは江戸の昌平黌の舎長を務めた時も、佐賀の弘道館で教えた時も同じでした。勤王派で嘉永3年(1850年)には義祭同盟を主宰し、西洋列強が近づく時勢に多くの青年に日本のあり方とその実現を考えさせ、生涯の師と仰がれました。惜しむべきは明治維新の前に、41歳の若さで亡くなってしまったことです。もし生きていれば明治新政府でも多くの功績を残したのではないのでしょうか。

枝吉神陽を知る入門の一冊「八賢伝」

近年、語られる事が多かった「佐賀の七賢人」に枝吉神陽を加え、八賢人として紹介したはじめての本。枝吉も含め、各々の業績やエピソードが読みやすくとまとられている。福岡博著/出門堂刊/1000円(税込)



▲「義祭同盟」の象徴とも言える楠木正成と正行父子像。楠神社の例祭(5月25日前後の日曜に開催)の時に開扉される

九州に枝吉先生あり松陰が息をのむ「奇男児」

枝吉の門下から明治政府で活躍する多くの偉人を輩出した事から「佐賀の吉田松陰」とも呼ばれているが、松陰は実際に佐賀に来て神陽と会った事がある。その印象は「奇男子」。後に九州に向かうという友人には、必ず神陽を訪ねるようにと勧めている。また、水戸の藤田東湖と並べ「東西の二傑」と目されていた。



▲吉田松陰(国立国会図書館蔵)

その容姿は体育会系？富士山だって下駄履きで

枝吉は実は後ろ姿の肖像画しか残っていないが、伝えられるところによると、身体は大きく、足は長く、顔は角張っていて口は大きく、まなじり長く、目は輝き、声を出すと障子が震えたとか。一見、書生とは思えない体育会系の体型。弟の副島種臣の話によれば、20里(約80km)は毎日歩いて良いと言う程の健脚家で、江戸の昌平黌(学校)にいた時は、下駄で富士登山をしたとか信じられない話もある。

誰のための学問か！優しき枝吉が怒る時

枝吉は町で子供を見かけると頭をなでて話しかけ、また酒宴の席などでは決して老人より先に帰ろうとはせず、その履物を揃えたりするなど穏やかな人柄であった。弟の副島種臣は、他人からの批判を気にしていた時、枝吉に「何のために学問をやっている！」怒られたのが生涯を通じて、一番恐ろしかったと振り返っている。

討つべきは異国か幕府か分裂した義祭同盟

枝吉が結成した勤王組織「義祭同盟」。しかし黒船来航で世間の情勢が一変すると、次第に勤王運動が藩の不利益に繋がると考える保守派と、倒幕すら視野に入れた過激な改革派に分裂していった。そんな改革派を率いていたのが創設者の神陽自身と弟・種臣の兄弟だった。結局その活動は藩政を動かすには至らなかったが、彼らの情熱は後の維新での精神的な礎となった。



▲安政年間の副島種臣

音吐如鐘眼炬
瑞然成貌拜捕神
勤王精魄真傳得
興起肥前百萬民
弟副島種臣拜首
予時聞枝吉先生死於二白三島地
之後未嘗日淡然言此志不承
少佐香神陽先生之墓嗣子也



▲「神陽先生拜神圖」(個人蔵/佐賀県立博物館 寄託) 枝吉の姿を伝える唯一の絵図で、楠木正成を祀っている

枝吉神陽足跡探訪コース【約2時間】(移動約70分+観光散策約50分)

モデルコース

義祭同盟の八幡神社から墓まで、若者の育成に捧げた人生を辿る



龍造寺八幡神社(楠神社)
地図▶P35 G-7

境内にある楠神社(写真)は枝吉が主宰した義祭同盟の拝殿であり、ここから多くの俊英たちを輩出していった。

☎佐賀市白山1-3-2
☎0952-23-6049



弘道館跡
地図▶P35 G-8

枝吉が教鞭を取り、佐賀の多くの偉人を輩出した藩校、弘道館の跡地。石碑は徴古館の左側に建ち、当時を偲ばせる。

☎佐賀市松原2-5-22(徴古館)
☎佐賀市観光振興課☎0952-40-7110



枝吉神陽誕生地
地図▶P35 G-9

佐賀城南堀沿い、かつて枝吉家の屋敷があった所で、現在は社会福祉会館の駐車場。弟の副島種臣の誕生地も同地。

☎佐賀県佐賀市鬼丸町7-18 回
☎佐賀市観光振興課☎0952-40-7110



梅林寺
地図▶P35 F-9

義祭同盟結成まで、楠公父子の木像が安置されていた寺。1850年の結成後、数年間はここで楠公を祀る義祭が執り行なわれた。

☎佐賀市本庄町大字本庄377
☎0952-24-9005



高伝寺
地図▶P35 F-9

鍋島家、龍造寺家の菩提寺で、枝吉の墓もここに。弟の副島種臣の墓と神陽枝吉先生碑も並び、その威徳を偲ぶ事ができる。

☎佐賀市本庄町大字本庄1112-1
☎0952-23-6486

はみだし情報 佐賀では「7賢人」というと鍋島直正、大隈、江藤、佐野、島、大木、副島。枝吉を入れて「8賢人」。最近注目を浴びてきた相良を入れると「9賢人」